平成22年9月1日発行

名古屋女子大学

11号

総合科学研究所だより

Research Institute of Human Ecology, Literature and Education

巻頭言

総合科学研究所長
竹尾　利夫
TAKEO Toshio

「学問の府」といわれた大学は、18歳人口の減少に伴い、選り好みをしなければ誰もが入学できる全入時代を迎えました。

定員数の確保が難しい大学では、学生の知的好奇心の希薄化など、教育に関する種々の問題が起こっています。現在、特色ある教育や研究をおこなうだけでなく、学生たちの多様なニーズに応えるための支援体制づくりに向けた改革が進められています。高等教育の場として、今後においても教育と研究の質の確保と、その有機的なつながりが、なお一層求められます。

「総合科学研究所」は生活科学研究所と教育研究所を統合して、平成13年に開設されました。研究所としては48年の長い伝統を持ちます。この間、大学の発展に伴い、本研究所では事業内容の見直しを実施してきました。とりわけ大きく変わったのが、研究所の根幹をなす機関研究です。特に教育に関する機関研究「大学における効果的な授業法の研究」は、それまでの語学教育、教養教育、初年次教育など、大学授業法の開発や研究を経て今年で10年目。現在は「多様な学習成果の評価方法の開発」のテーマで研究が進行しています。

機関研究の意義は、教育の理論と実践の有機的な結合を図るところにあります。研究所が中心となって実施している「大学における効果的な授業法の研究」や、プロジェクト研究「教員養成課程における実技教科の指導内容の検証」は、教育力の向上を最重点課題と考えた本学の歩みとも言えます。平成18年度から始まった「創立者越原春子および女子教育に関する研究」の成果も期待されます。さらには、本研究所と連携した中学校・高等学校の「学力向上に関する」研究も、研究授業の公開と研究会を重ねており、頼もしい限りです。なお本誌には、現在進行している機関研究4テーマの紹介と報告を掲載しました。お目通し下されば幸いです。

また、本研究所の特色ある活動として「開かれた地域貢献事業」があります。ここ数年、名古屋市瑞穂保健所、瑞穂児童館との共催で地域貢献事業を展開しており、年毎に好評を博しています。今後も公共機関との交流事業を通じて“地域に愛される大学”として社会貢献を推進していく所存です。皆様のご支援とご協力をお願い申し上げます。

平成21年度「開かれた地域貢献事業」報告

名古屋市瑞穂保健所　「若返り教室 キラキラコース」を終えて

名古屋市瑞穂保健所 保健師　松田圭子

瑞穂保健所では、毎年認知症やうつを予防するための教室を「若がえり教室」として実施してきました。この教室の参加をとおして、毎日をいきいき・ワクワクと暮らし認知症を予防する方法を考え、最後まで自分らしい人生を送っていただきたいと考えています。認知症の予防には、アクティブなプログラムに参加することで若々しい気持ちや頭・身体を維持していくことが効果的であるといわれています。

平成21年度は、名古屋女子大学と一緒に9月からの「若がえり教室」（6日間コース）を開催させていただきました。60代から80代までの男性4人・女性21人が参加されました。回想法や伝統的な遊び・拓本・ヒノキを使っての作品づくり・体操など、名古屋女子大学ならではの多岐に亘る内容で楽しい時間を過ごすことができました。回想法では自分の子供時代のことを思い出すことで話題を共有し楽しく過ごすことができました。拓本やヒノキ作品では、今までにはない体験をすることができました。また、各プログラムの中で大学生との触れあう機会を持つこともできました。

名古屋女子大学の皆様にはプログラムの作成から実施に向けて、参加者の皆さんが楽しくプログラムに参加することができるような工夫をたくさんしていただきました。教室終了時には、参加者から「初めてやることでドキドキしたけれども楽しかった」「いろいろな話ができてワクワクした」などの嬉しい感想をたくさんいただきました。また、「若い世代の人と話すことができて気分も若がえった」などの声もあり、男性の参加者で最後まで継続できた人が多かったのも特徴的でした。

大学がもつ様々な力を保健所事業に提供し地域に貢献していただくことで、高齢者が若々しく元気に暮らしていくために良い機会を得ることができました。今後とも、地域での活動を大学と協働して開催していくことで、ますますこの事業を発展させていきたいと考えています。

音楽や歌に合わせて体を動かしましょう

懐かしい思い出で、いきいき♪
キラキラ（回想法の実施）

新しいことにチャレンジ!拓本をとってみよう

平成21年度
「開かれた地域貢献事業」
報告

名古屋市瑞穂児童館　交流事業を終えて

名古屋市瑞穂児童館　館長　長谷川榮子

平成21年度は、名古屋女子大学との交流事業として下記の8回の講座を実施しました。

「パソコンミュージックを楽しもう」「乳幼児の食育相談」「拓本をとってみよう」「ボディトーク・からだをつかったコミュニケ―ション」「おねえさんとあそぼう」「子育てグループ教室」「バレンタインのチョコレート菓子づくり」「ボールゲームなどであそぼう」等盛り沢山でした。

どの講座も好評でした。その一部を紹介いたします。「バレンタインのチョコレートづくり」は調理室をお借りしました。小学生30人が学生さんと先生の指導を受けて和気藹々と参加できました。子どもたちはおいしそうなチョコを自慢げに家族に見せていました。「パソコンミュージックを楽しもう」はパソコン画面にある五線紙にマウスで音符を貼り付けていくと曲が作れるソフトウエアを使いました。絵本の絵に合った曲を作り発表しました。楽しかったので又作りたいと喜んでいました。パソコンが音楽でも使えることを、子どもたちは知ったのではないでしょうか。

もう一つの事業として「クリスマスを皆で楽しもう」を実施しました。「ボールでサンタと対戦」「いろんなシャボンで遊ぼう」「人形劇おねえさんと遊ぼう」「影絵サンタクロースがやってくる」「ヒノキ材を使ってミニツリーや飾りをつくろう」「世界のおもちゃで遊ぼう」の6つのワークショップを行いました。どのコーナーも楽しめたようです。また参加したいとの多くの声がありました。

児童館ではこのように積極的に遊びを発信し、人との関係を大切にするさまざまな活動にとりくんでいきたいと思っております。「近所のともだちとやってみたよ」とか「又遊びたい」との子どもたちの声を聞くとうれしくなります。クリスマスイルミネーションもオブジェから製作して下さり、点灯すると光のコーディネートを体感でき、散歩をしている人々からも「きれいだね」と好評でした。クリスマスオーナメントクッキーづくりも好評でした。このような事業を通して児童館ではできない事業や行事を実施でき事業の幅が広がってきました。多くの学生さんや熱心な先生方に足を運んでいただき、地域に開かれた児童館としてPRすることができました。利用者からも楽しい行事が増えてうれしいとの声も多いです。このような交流をきっかけに個別のボランティアを希望される学生さんもあり受入れております。さらに人的交流をしていきたいものです。21年度の瑞穂児童館の利用者は前年度より8,674人増えて46,855人になりました。利用者の方々の「いい出会いの場」になるように、又「遊びのきっかけ」をつくり、より楽しい施設になるように連携が深まることを願っています。今後ともよろしくお願いします。

「ボディトーク～からだをつかったコミュニケーション」

「バレンタインのチョコレート菓子づくり」

クリスマスイベント「クリスマスを皆でを楽しもう」

機関研究

「大学における効果的な授業法の研究５」
～多様な学習成果の評価方法の開発～

石倉瑞恵・白井靖敏・遠山佳治（代）・羽澄直子・原田妙子・幸順子

平成21年度～平成23年度の本機関研究では、GPA制度など中教審答申「学士課程教育の構築に向けて」の内容の検討とともに、昨年度から他大学等の具体的事例を参考にして、さまざまな成績評価方法について、大学・短大の高等教育機関の質保証という問題と関連させながら検討を重ねています。

今年度は本研究の2年目にあたります。本学における授業のより良い評価方法を具体的に検討するに際し、各教員が担当する授業について、具体的な評価方法の実施状況を知ることが必要と考えました。さらには、中教審答申「学士課程教育の構築に向けて」の内容に絡ませながら成績評価に関するお考えをお聞きしたいと考えており、今年12月～来年1月には全教員（非常勤講師を含む）を対象としたアンケート調査の実施を計画しています。

なお、7～8月に関しては、上記のアンケートに関する予備調査を、研究メンバーを中心に実施します。その結果で、アンケート調査項目等の検討をより一層進め、12月実施予定のアンケート調査を円滑に運用するよう努力していきたいと考えています。（文責：遠山 佳治）

機関研究

「創立者越原春子および女子教育に関する研究」
～職業人としての専門教育－教員養成と医学を中心に（19世紀後半~20世紀前半）～

石倉瑞恵・氏原陽子・木原貴子・遠山佳治・羽澄直子（代）・依岡道子

平成17年度から始まり今年で三期6年目を数える本研究では、創立者越原春子の建学の精神、教育理念および国内外の女子教育について、各研究メンバーがそれぞれの専門分野に基づいて問題提起し、多角的な検証と討議を重ねてきました。

三期目（平成21年～22年度）の最終年となる今年度は新たなメンバーを迎え、テーマを「職業人としての専門教育－教員養成と医学を中心に（19世紀後半～20世紀前半）」と定めました。

昨年度の研究会議では、日本、アメリカ、イギリス、チェコにおける女子教育の始まりと変遷についての検証が行われ、それぞれの女子教育制度が発展する過程には、歴史や地域の差を越えたいくつかの共通点があることが確認されました。その一つが、教員養成と医学の分野における女子への専門教育です。哲学、宗教、法学といったいわゆる伝統的なアカデミックな領域は、女子への門戸をなかなか開きませんでしたが、教育や医学といった実務的な分野には女性が必要とされる場があり、志のある女性たちの進学先となっていました。今年度はこの両分野における女子職業教育に焦点を当て、女子教育の意義と成果について考察をする予定です。

（文責：羽澄 直子）

機関研究　「幼児の才能開発に関する研究」
～幼児の育ち合いを促す保育実践Ⅲ～

幼児保育研究グループ

▲「いっしょにさがそうね」

「異年齢交流、仲間、自然等をキーワードとした育ち合い」の研究は、今年度3年目を迎え、異年齢交流の育ちについてを「自然」に注目する中で、その教育的意義を子どもの姿から実践研究することを進めています。

6月に、全学年で「オアシスの森（相生山）」への遠足を実施しました。自然の中で過ごしたこの経験で得たこととして、五感を使っていろいろなものに興味関心を高め、自ら発見していく喜びを感じられたことがあげられます。また、異年齢交流を通して、互いに信頼感を抱き、3歳児は5歳児に対して、精神的に頼りにし、5歳児は年上として言葉を選び、思いやりの気持ちを持って3歳児への関わりを意識する姿も見られました。実践の前後に開いた研究会では、これまでの子どもたちの経験の積み重ねに加え、教師の設定した場面以外での自然な流れの中での年齢を超えた交流と子どもの個性を大切にした対応をすることについて確認しました。さらに、教師は、安全管理に配慮しつつ、子どもが自然の中で思いきり遊ぶことから生まれる予想外の交流のあり方を支えていくことの重要性が明らかとなりました。継続して、より良い実践のあり方を検討していきたいと考えています。

（文責：森岡 とき子）

機関研究　「中学生の学力向上に関する研究」
～主体的な学びの姿を求めて～

中学校学力向上研究グループ

▲研究授業

▲研究会

本年度新たにスタートした新しい中高一貫校に向けた取り組みは、当然ながら中等部1年生のためだけにあるわけではありません。本校が今後さらに質的向上を図っていくためには、6ヵ年を通じて、どのような生徒像を描きながら授業をつくり上げていくかという研究が不可欠となります。昨年度のテーマである「思考力を高める」ことについては、今後も研究を継続していく必要があるという視点に立ちつつ、本年度の研究活動においては「学習者の主体的な学びの姿」に着目して進めていきたいと考えています。

活動の進め方としては、昨年度同様、①テーマに関する個人研究とグループ研究、②公開授業、の2種類の形態としています。①については、8月の夏期研究合宿に向けて教員一人ひとりが「主体的な学びの姿」を念頭に置いた授業を求めて授業指導案を作成し、それを合宿の資料として3日間の研究協議に臨みます。②については、今後3回の研究会並びに2月の研究発表会と期を同じくして研究授業を公開し、本校教員と大学の先生方による研究協議を行いながら、本校がめざすべき授業像や求めるべき生徒像を明らかにしていきたいと考えています。研究授業は6月、10月、1月、2月を予定しており、研究会を伴わない研究授業も8月、9月、11月に予定しております。

（文責：福田　誠）

機関研究　「高校生の学力向上に関する研究」
～思考力を育み、生徒が主体的に学習に取組む授業のあり方～

高等学校学力向上研究グループ

▲研究授業

総合科学研究所と連携した高等学校の研究活動も4年目を迎えました。昨年度の「思考力を育む効果的な授業のあり方」を受け継ぎ、今年度は「思考力を育み、生徒が主体的に学習に取り組む授業のあり方」をテーマに掲げました。高等学校では、小学校や中学校と比べて生徒主体の授業が行なわれていないというのが一般的に言われることです。高校では教える量や難易度があがることから、教師は一方通行的な講義形式の授業になりがちです。

昨年度の研究を踏まえ、「思考力」即ち「知識を活用して論理的に考え、問題解決などの実践に生かす力」は、生徒が主体的に学習に取り組む授業が有効であると考え、授業を改善していくため、研究していくことにしました。そして今年度も、他府県の研究大会等に積極的に参加し、教育講演会を開催し、日々の授業を見つめ直す機会を設けます。研究授業を行ない、生徒が主体的に学習に取り組む授業のあり方を模索し、生徒にとっての向学心の増大、学力向上、さらには生きる力に結びつけたいと思います。　（文責：秋田 武史）

プロジェクト研究　「教員養成課程における実技教科指導内容の検証」
～小学校教育現場の卒業生からのフィードバックによる～

伊藤充子・亀山有希・小林田鶴子（代）・佐地多美・渋谷寿・和井田節子

本学児童教育学科では、小学校教育現場に多くの卒業生を輩出しております。こうした本学の特徴を活かし、本研究は、音楽・図画工作・体育の実技教科について、大学で学んだことがどのように現場で役立っているか、あるいは、どういう内容が不足しているかを、現職の卒業生からフィードバックさせるものです。実技教科に的を絞ったのは、実技は技能習得に時間がかかるものであるにも拘わらず、現場では即戦力が求められる科目であるからです。

具体的には、卒業後数年の小学校教諭にアンケート及び聞き取り調査を実施し、そこから本学の実技教科指導内容を検証します。

既に、平成21年度の卒業生には、教員採用試験の実技試験内容を調査し、今後の採用試験対策にも活かせるようにしました。

現在、プロジェクトメンバーのゼミ生や担任クラスの卒業生を中心に調査が進んでいますが、指導案作成や模擬授業など実践的な授業の成果が示される一方で、益々多様化する児童への個別対応など、現在の教育現場特有の問題も浮き彫りになりつつあります。このような問題に対して、実技教科専門教員と、教育学を専門とする教員が協力して、今後も研究を進めていきたいと考えております。

（文責：小林 田鶴子）

平成22年度 「開かれた地域貢献事業」

本研究所が推進する地域貢献事業は今年度で5年目になります。今年度は、昨年度から進めております、2つの公的機関との協力関係を更に強化しながらコラボレーション事業を進めて参ります。新たな試みとして、今年度は学内公募という形で本地域貢献事業への参画を先生方にお願いしました。その結果多くの提案をいただき、新たな領域が加わった本学ならではの充実した企画が採択されました。

まず、名古屋市瑞穂児童館との交流事業は、平成22年9月から23年2月にかけてほぼ月1回のペースで、保育・教育、栄養・生活関係の7つの講座を行います。また、これらとは別に、12月の児童館クリスマスイベントとして5つの楽しい企画を行います。これらは、文学部児童教育学科、家政学部食物栄養学科、短期大学部保育学科・生活学科の教員と学生の有志、名古屋女子大学同窓会「春光会」および総合科学研究所教職員が協力して実施いたします。

2つ目の瑞穂保健所との交流事業は、平成22年9月から23年1月にかけて、65歳以上の高齢者を対象とした「若がえり教室キラキラコース(平成22年度認知症・うつ予防教室)」を支援する形で、6つの企画を行います。これらは文学部児童教育学科、家政学部食物栄養学科・生活環境学科、短期大学部保育学科・生活学科の教員と学生の有志、および総合科学研究所教職員が協力して実施いたします。

以上のように、名古屋市瑞穂児童館・瑞穂保健所とは昨年以上に密な連携を行い、より充実した地域社会への貢献を推進・発展させて参ります。

(文責:渋谷　寿)

講演会のお知らせ

演題　戦後教育と日本人の真情再考

日時 9/17(金) 10:30～12:00

場所 学校法人越原学園　越原記念館ホール

毎年行っております総合科学研究所主催の大学講演会は、ここ数年間、機関研究の一つである「大学授業法の研究」に関係のあるテーマで開催してきましたが、今年度は、教育の根幹である哲学的な問題を取り上げることに致しました。本学児童教育学科には、『教育的人間学』などを著わされた、著名な教育学者であられる、和田修二教授が在職されています。同教授の長年にわたる教育学と教育実践の経験をとおした話をうかがうことは、本学教職員にとりましても貴重で有意義な体験になると考えています。

講師
本学文学部・大学院人文科学研究科教授
和田 修二 WADA Shuji

略歴
昭和7(1932)年生まれ。
京都大学大学院教育学研究科博士課程修了。
京都大学教授・佛教大学教授を経て現職。
京都大学名誉教授、教育学博士

著書
『子どもと人間学』(第一法規)
『教育する勇気』(玉川大学出版部)
『教育的人間学』(放送大学)

今年度運営委員

委員長　原田　妙子 HARADA Taeko (短期大学部)
石原　久代 ISHIHARA Hisayo (家政学部)
市原　千博 ICHIHARA Chihiro (短期大学部)
竹内　若子 TAKEUCHI Wakako (家政学部)
羽澄　直子 HAZUMI Naoko (文学部)

研究所メンバー

所長　竹尾　利夫 TAKEO Toshio
顧問　河村　瑞江 KAWAMURA Mizue
主任　渋谷　寿 SHIBUYA Hisashi
講師　越原　もゆる KOSHIHARA Moyuru
職員　今峰　可南子 IMAMINE Kanako

編集後記

ここに総合科学研究所だより第11号をお届けいたします。執筆・編集にご協力いただきました方々に感謝申し上げます。本号では、現在進行しています機関研究、プロジェクト研究、今年度実施されます地域貢献事業の内容などをお知らせいたしました。本研究所は、時代・社会の変化に対応すべく事業を推進して参ります。今後も総合科学研究所の事業をご理解の上、ご参加をお願いいたします。

主任　渋谷　寿

名古屋女子大学　総合科学研究所だより
平成22年9月1日　11号
発行・編集/名古屋女子大学　総合科学研究所　〒467-8610 名古屋市瑞穂区汐路町3-40　TEL052-852-1111(代)
本誌記事、写真の無断転載を禁じます